# 映画「北の零年」と、我が故郷：洲本市

１月１５日に封切られる吉永小百合主演の映画「北の零年」は、我が故郷：洲本市とゆかりのある映画。

江戸時代、淡路は徳島阿波藩の蜂須賀氏の支配下にあり、洲本に出城を築き、筆頭家老の稲田氏を城代として赴任。

明治 2 年に明治政府は新たな身分制度を設け、武士は士族と卒族（旧足軽以下の下級武士）に分けられ、禄高も新しい身分に応じて減らされることとなり、家老職だった稲田家の当主は一等士族となったが、彼の家来に過ぎない家臣たちは士族よりも下の卒族にされる。その処置を不満とした稲田家は、阿波藩からの分藩独立運動を起こしたが、これは藩に対する叛逆とみなした阿波本藩の侍たちは、稲田家ゆかりの者を殺傷・殺害、屋敷を焼き討ち。これが世にいう「庚午事変（こうごじへん）」。

この一件に対する中央政府の処置は厳しく、阿波本藩の首謀者は切腹、または伊豆八丈島などに流罪。一方の、稲田家側についても、争った人達が同じ洲本に住んで再度争いが起きることを恐れた新政府は、稲田家主人の移植以下、家臣団に、北海道日高国静内開拓という集団移住の命令を出した。

この映画は、「庚午事変」後の北海道静内地方へ移住を命じられた洲本城代家老稲田家の家臣団が北海道の原野で厳しい自然と闘いながら、原野開拓に挑んでいった史実を踏まえて作られた壮大なドラマとか。

また、この映画は、2001 年春にＮＨＫで放送された「お登勢」（船村馨原作）の続編ともいうべきもの。テレビドラマ「お登勢」は洲本を舞台として、庚午事変が起きる前後を描き、北海道へ移住するシーンで終わっているが、主人公は異なるものの、「北の零年」に描かれているドラマは「その後のお登勢」であるともいえるとか。

静内春立海岸には、船の舳を象った「上陸地記念碑」が建っており、丸くあけられた空洞のはるか先は洲本の方向を指している「望郷の碑」でもあるとか。

（参考資料：「洲本市ズームアップ　平成９年３月　洲本市発行」）

去る１２月１２日の洲本市民会館での特別上映会では、主演の吉永小百合や石田ゆり子、行定勲監督などが、舞台挨拶があったよう。

私はもちろん映画を鑑賞しますが、みなさんもお時間があれば、ご鑑賞を！

（2005 年 1 月 10 日　記）